

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	田島 悠史
<p>主論文題目： 小規模地域アートイベントの有用性と持続性に関する研究 -みなとメディアミュージアムを事例として-</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本研究は、小規模地域アートイベントの運用モデルを提言するものである。</p> <p>昨今、地域アートイベントが注目されている。これは地域の芸術表現を活用した有期の事業を指し「芸術祭」「アートフェスティバル」「アートイベント」「アートプロジェクト」などと呼ばれる。これらは地域活性化を主眼として、日本国内の各地で行われ、その一部は経済効果などで成果を挙げている。一方、その多くは規模の小ささや、脆弱な組織構造のため、経済効果などの成果は挙げられていない。</p> <p>しかし活性化を必要とする地域の地域アートイベントほど、小規模にならざるを得ない。この現状が続けば、地域アートイベントの社会意義自体への疑問は避けられない。持続的に社会に貢献する、小規模地域アートイベント独自の運用モデルの提言は急務である。</p> <p>具体的な研究内容として、質的研究手法を中心に小規模地域アートイベントの有用性と持続性を明らかにした上で、それらの知見に基づいた運用モデルを提言する。本研究にあたって、茨城県ひたちなか市那珂湊地区で開催している小規模地域アートイベント「みなとメディアミュージアム(MMM)」を対象に5年間にわたって調査を行なった。</p> <p>有用性の研究では、MMM展示作品の地域メディア機能を示した上で、そのために必要な条件として「制作過程内の住民協働」「地域住民の作品素材化」「一般鑑賞者への許容性」「芸術家自身の情報発信」を明らかにした。それを踏まえて「小規模地域アートイベントを『地域のつながりを生み出す媒体』と考え、芸術作品や企画を考えること」で、小規模地域アートイベントが地域に有用になることを明らかにした。</p> <p>持続性の研究では、MMMに「中心スタッフによるイベントの共有」「協力者のゲートキーパー化」「周辺スタッフによるイベントの日常化」という変化が分かった。それを踏まえて「地域と小規模地域アートイベントの両方に当事者意識を持った人による、地域のつながりを広げる意識」と、小規模地域アートイベントの持続性との関係が明らかとなった。</p> <p>これらを踏まえて、小規模地域アートイベントの運用モデルとその遷移プロセスを、その汎用性を示すために成功例や失敗例を挙げつつ、提言した。これは、トップダウン型の初期運用モデルから、関係者同士が緩やかにつながる中期運用モデルを経て、活動の主体が他の関係者に移行する後期運用モデルに至る変遷を示している。</p> <p>キーワード：小規模地域アートイベント、地域活性化、有用性、持続性、運用モデル</p>			